

亡き妻を想う



入院 重朝

毎日、テレビを我が友として何することなく過ごしている。自分が米寿の年を迎えたということが何ともおかしく信じがたいことのように思える。

米寿というのは八十八才ということだから、ホントに88年の間、たいしたことをしたわけではない。ただウスボンヤリとすごしてきたのだ。ただ一つだけ、切実に思い感ずることはある。亡き妻、貞子のことだ。

オレの人生でただ一つ大事だったことは彼女とのエンを得たことだった。これは奇跡みたいなことである。

彼女とのエンを得たことが私にとってただ一つのタカラであった。その彼女もすでに亡い。

彼女のいない人生など、全く無に等しいのである。しかし、こうして生きながらえているのはなぜか。怖いナゾであるのだ。このままだとヒョットすると百まで生きるかもしれないのだ。

運命というものを考えざるを得ない。私はもの心ついた時から、この世の中は、何となく不思議だということを感じていた。丁度13才の時、少年期の生じる時、つまり中学生にあがるうという時、両肺肋膜炎から腹膜炎を発症し、九死に一生を得た。

二年間の養生を過ごし、新しい健康体を取りもどした。これは、一つの試練でもあった。つまり、生きる不思議さを体験したのだ。

今、米寿の年を迎えて、文字通りありがた

いと思う。身の回りは長女が私のメンドウを
みるため、嫁ぎ先から帰ってきている。これ
はいわばワガママであるが、めんどろだから
お互いに深い事情はきかず触れないようにし
ている。これも一つの人生の断面なのだ。

今日我が友、テレビをみるともなくみてい
たら、ホタル事情を映していた。そうだ、ホ
タルの季節なのだ。自然はゲンゼンと生きて
いる、決して裏切らない。

(炉ばたセイ談庵主)



第7回入来薪能『巴』(2010年8月28日)より